

(別紙2)

審査の結果の要旨

氏名 長田 怜

長田怜氏の論文「初期カルナップの实在論と反实在論」は、ドイツ生まれの哲学者ルドルフ・カルナップの、初期の大著『世界の論理的構築』（以下『構築』）に焦点を当てて、そこから实在論・反实在論論争に対する新しい眺望を改めて探り出そうとする、斬新かつ貴重な試みである。『構築』は、論理実証主義の代表として、有意な主張は直接的な経験命題に還元できるという還元主義を展開していると理解されがちだが、本論文は、そうした理解は正確ではなく、厳密には、対象間の関係の「構造的標示」の仕方を析出することで、世界の論理的構築を果たそうとしたものであること、そしてそこから、現代の实在論論争に対するインパクトを読み取っていくこと、その二つを解明しようとしている。

長田氏は、まず第1章において、『構築』が全体として、具体的対象の指示ではなく、対象間関係の「構造的標示」を主題とした構造主義を展開していることを確認する。次に第2章において長田氏は、『構築』に対する歴史的解釈・批判を紹介し検討する。一つは、前段に述べた、還元主義を読み取る経験主義的解釈である。これはクワインの読み方に代表される。しかし、こうした読解はいまや説得性を失った。『構築』について現在は、新カント主義的な問題設定の延長線上の議論として読解するフリードマンらの理解、物理学を雛形として心理的对象までも構成しようという科学的哲学としての読解、などが勃興している。長田氏は、こうした動向を踏まえつつ、カルナップのやり方では現象の抽出に過不足が生じるとするグッドマンの批判や、結局対象の直示的關係を前提してしまうのではないかとするフリードマンの批判を真剣に受け止めようとする。その上で第3章以降で实在論論争が論じられる。まず第3章で長田氏は、カルナップの『構築』は、实在論論争に関して、どのような意味での实在論／反实在論の対立に関しても、オフィシャルには、「中立主義」の立場をとっていたことを明るにもたらず。けれども、長田氏によれば、『構築』は、「中立」を標榜し、対象の主観性ではなく対象規定の手段の主観性を反实在論的文脈で強調しつつも、实在論的文脈において対象自体の存在を前提するという点で大きく实在論に実際には傾斜している。そのことが第4章で、明確に反实在論的なグッドマンの『現象の構造』との比較において浮き彫りにされる。そして最後に第5章で、記号と世界の独立性を主張する实在論に対して、それでは両者の対応関係は一意的に定まらないとする、パトナムのモデル論的論証による实在論批判を取り上げ、『構築』にもその批判が妥当しうることが示唆される。しかし、かえってそのことで、カルナップの「構造主義」や「中立主義」が向かうべき方向性が示されるに至った、と結論づけられる。

「世界の論理的構築」というときの「世界」は実は通時的に変容していくと、いう事実への追求と掘り下げがやや不足しているとはいえ、分析哲学の古典でありつつもきちんと読まれることの少ない大作に関するチャレンジングな論証は、博士（文学）の学位に十分に値すると判断される。